

シリーズ 私の一冊の本

国際関係学部 小谷野俊夫 先生

福沢諭吉著 富田正文校訂 『福翁自伝』

自由閲覧室 推薦図書 289.1/F 85 岩波書店 出版
閲覧室 2階 学生文庫 岩文青/102/2

本書は幕末から明治後期にかけて、私塾を設けて若者に英語を教えるとともに、翻訳・著作等により西洋の事情を国民に知らせ続けた先覚者、福沢諭吉の口伝の自伝である。その語るところは、少年時代の中津藩の旧弊姑息な社会や、長崎や大阪で一心不乱にオランダ語を学んだことから、修得したオランダ語を捨て英語を独学で学んだこと、海外事情の紹介、晩年（明治34年）にいたる当時の社会の変貌の様、さらには、自らの処世の方針など多岐にわたっている。

私は、小学生高学年のころ、この本を子供向けに書き直した偉人伝により福沢を知った。丁度そのころ英語を習い始め、子供心に福沢が大阪の適塾でオランダ語を熱心に学んだ姿を思い描き自分も英語を一生懸命勉強しようと思ったものである。その後、岩波文庫で原本を読み、興味の対象も幕末から明治維新にいたる社会の変化を彼がどのように見ていたか、当時の日本社会と西欧文明国との差はどのようなものであったか、などに広がっていった。

今読み返して面白いのはやはり彼の書生時代の生活である。また、当時とくらべ現代社会の技術進歩には改めて驚かされる。例えば、当時は、外国書は極めて希少・高価であったため、写本をして学費を稼ぐ者がいた。今では外国書も高価ではなく、インターネットで早期に取り寄せも可能だ。

本書は語り口が軽妙で分かりやすく、物語の楽しみを十分に味合わせてくれる。